

地域保健

9

2016

●特集1

がんサバイバーシップ
を支える

●特集2

災害時の子どもの
メンタルヘルス





《表紙イラスト》
山本まもる

「ムーンホテルからの月ほこんなに大きく見えるんだよく見えるんだよ」

6

【特集1】

がんサバイバーシップを支える



8 がんサバイバーシップ支援—保健師が地域の担い手に

《取材協力》高橋 都さん（国立がん研究センター）、土屋雅子さん（同）

16 名古屋市がん相談情報サロン・ピアネット—がん患者さんと家族が安心して相談できる場所

花井美紀（名古屋市がん相談情報サロン・ピアネット 委託事業者 NPO 法人ミーネット）

22 三重県がん相談支援センターの取り組み—がん患者とその家族の療養生活を支える

黒田和博（公益財団法人三重県健康管理事業センター 三重県がん相談支援センター）

28

【特集2】

災害時の子どものメンタルヘルス

30 災害時の子どもの心のケア—災害後期を見越した急性期・中期の対応について

本間博彰（あさかホスピタル）

36 被災地の子どもの心のケア—保健師として大切なこと

由井幸子（宮城県気仙沼保健福祉事務所）

42 熊本市における子どもの心のケア

《取材協力》熊本市教育委員会事務局、熊本市健康福祉局保健衛生部、熊本市子ども発達支援センター

② ひよこ、ホップ、ステップ、ジャンプ！▶木村芽衣さん（神奈川県平塚保健福祉事務所秦野センター 保健福祉課）

⑤2 ピープル ▶小河光治さん（公益財団法人あすのば代表理事）

⑤6 2025 年問題に備える～みんなで取り組む「地域づくり」▶東京都品川区

⑥4 REPORT ▶平成 28 年度保健師中央会議

⑦4 理解して生かす保健師用語 ▶生きづらさ

⑦6 NEWS ▶児童虐待防止に向けて対策を強化

⑨0 情報BOX

⑨6 次号予告／奥付

連載

④8 Integrated Health のすすめ《第3回》／今 知美

⑤0 ESSAY 国際保健《第15回》／松田正己

⑦0 保健師のための閑話ケア《第66回》／藤本裕明

⑦8 中臣さんの環境衛生ウォッチング《第51回》／中臣昌広

⑧2 地域保健で求められるソーシャル・キャピタル醸成事業
〔隔回連載〕《第2回》／佐々木 亮平、岩室 紳也

⑧6 言葉と発達 いまどき子育てアドバイス《第225回》／中川信子



木村芽生さん

● 神奈川県平塚保健福祉事務所秦野センター 保健福祉課

とにかく動いて現場で感じることを大切に。
憧れの先輩を追いかけて、
自分でも確かな手応えをつかみたい。



秦野市内を流れる水無川の河原にて

文:太田美由紀 (ライター) 写真:C.Kent

がんサバイバーシップを支える

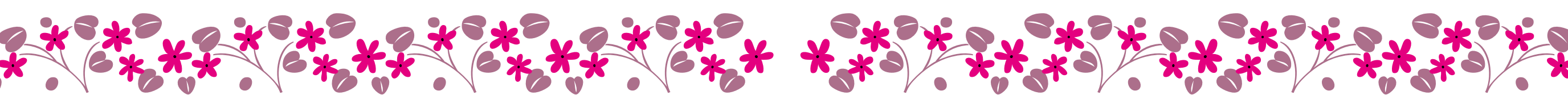
一生のうちに、国民の2人の1人ががんにかかると言われていたが、近年の医療の進歩により、がん罹患後の生存率は大きく向上してきている。これからの時代は、がんサバイバーを社会全体で支えていくしくみが不可欠である。

今回の特集では、がんの診断や治療を受けた後も、充実した幸せな人生を送るための「がんサバイバーシップ」を地域で支えていくために、全国の自治体の先進事例を紹介しながら、行政保健師の役割を考えたい。

P 8 がんサバイバーシップ支援―保健師が地域の担い手に
◎《取材協力》高橋 都さん、土屋雅子さん（国立がん研究センター）

P16 名古屋市がん相談情報サロン・ピアネット
◎花井美紀（NPO 法人ミーネット）

P22 三重県がん相談支援センターの取り組み
◎黒田和博（公益財団法人三重県健康管理事業センター）



2016年4月14日、16日、熊本地方を震源とする大きな地震が起こった。現在も余震が起こる中、被災地の子どもたちに、食欲がない、おびえる、建物に入るのを怖がるなどの異変が起こっていると聞く。

阪神・淡路大震災、東日本大震災のときも、子どものメンタルヘルスが問題となっていた。被災してなるべく早いうちに適切な対処をしなければ、複雑な問題にもなりかねない。

今回は、東日本大震災で子どもの心のケア支援に当たっていた医師と保健師に、当時の経験をもとに子どものメンタルヘルスへの対応、必要とされる支援をご執筆いただいた。また、熊本市の現在の取り組み状況もお届けする。



P30 災害時の子どもの心のケア―災害後期を見越した急性期・中期の対応について
◎本間博彰（あさかホスピタル）

P36 被災地の子どもの心のケア―保健師として大切なこと
◎由井幸子（宮城県気仙沼保健福祉事務所）

P42 熊本市における子どもの心のケア
◎取材協力：熊本市教育委員会事務局、熊本市健康福祉局保健衛生部、熊本市子ども発達支援センター

特集

2

災害時の 子どもの メンタルヘルス

小河光治

さん

●公益財団法人あすのば代表理事

地域全体で子どもを育てる社会の実現を

格差拡大が問題となる中で、子どもの貧困対策は待ったなしだ。昨年6月、さまざまな立場からこの問題に取り組んできた人々が結集し、子どもの貧困対策を支援する「あすのば」を立ち上げた。代表を務める小河光治さんに、子どもの貧困対策の現状と「あすのば」の取り組みについて伺った。

●聞き手……………編集部

行政の施策を後押し

—「あすのば」という名称の意味について教えてください。

小河 「明日の場」という言葉と「US（私たち）」「NOVA（新しい・新星）」という言葉をかけています。子どもたちは独りではなく私たちと一緒にあり、子どもの貧困は私たちみんなの問題であるという意味があります。また、そうした考えに賛同する人たちが集う場という意味と、すべての子どもたちが明日に希望を持ち、輝く新星

のような人生を送ってほしいという願いも込められています。

—具体的には、どのような活動をされているのですか。

小河 私たちの活動には3つの柱があります。1つは「調査・研究とそのデータなどに基づいた政策提言」です。研究者や実践者が連携して子どもの貧困の実態調査をし、その結果に基づいた政策提言をしています。2つめは「活動の持続・発展のための支援団体への中間支援」。子どもの貧困対策に取り組む全国の実践者たちを支えるた

めのワークショップ、交流会、研修会などを開催しています。3つめは「自立に向け、物心両面での子どもたちへの直接支援」で、自立につながるキャンプの開催、小・中・高校生への入学給付金の支給、子ども支援のモデル事業などを実施しています。

—「あすのば」を設立するまでの経緯についてお聞きます。

小河 それを説明するに当たって、まず「子どもの貧困対策の推進に関する法律」ができた経緯について触れたいと思います。

民主党政権になった2009（平成21）